



令和元年度 中学生平和作文
入賞作品

伊勢原市

中学生平和作文入賞作品

〈優秀賞〉

(順不同・敬称略)

作品名	学校名	氏名	ページ
誰もが平和の一ピース	伊勢原中学校	関 隆成 <small>せき りゅうせい</small>	1
笑顔あふれる未来のために～私たちが出来ること～	伊勢原中学校	末吉 陽菜 <small>すえよし はるな</small>	1
受け継がれる平和への願い	山王中学校	大場 泰之 <small>おおば やすゆき</small>	2
戦争を二度と繰り返さないために	山王中学校	廣田 和奏 <small>ひろた わかな</small>	3
「新しい時代に思う」	成瀬中学校	岡田 拓能 <small>おかだ ひろたか</small>	4
私なりの「平和」	成瀬中学校	釜野 結衣 <small>かまの ゆい</small>	5
平和とは何か	中沢中学校	亀井 颯太 <small>かめい そうた</small>	6
未来の平和のために	中沢中学校	水嶋 輝 <small>みずしま きら</small>	7

〈佳作〉

作品名	学校名	氏名	ページ
平和な世界へ	伊勢原中学校	五月女 隼人 <small>きおとめ はやと</small>	7
「平和から戦争の過去と向き合う」	伊勢原中学校	渡邊 那絃 <small>わたなべ なお</small>	8
忘れてはならない日	山王中学校	小野寺 陸 <small>おのでら りく</small>	9
核、白菊の思い	山王中学校	栗原 いかる <small>くりはら</small>	10
「平和」のバトンを繋ぐ	成瀬中学校	前川 颯太 <small>まえかわ そうた</small>	10
言葉で伝える平和	成瀬中学校	大竹 恵 <small>おおたけ けい</small>	11
「平和」とは	中沢中学校	薮内 玲音 <small>やぶうち れお</small>	12
本当の幸せ	中沢中学校	振原 菜摘 <small>ふりはら なつみ</small>	13

*平和作文審査対象者 市内公立4中学校3年生

*応募総数 744点

受賞おめでとうございます！



誰もが平和のピース

伊勢原中学校

関 隆成

平成が終わる。そう決まったのは天皇陛下が生前退位の意向を表明されたからであった。二〇一六年にその意向を示されたことよってスクープされ、議論呼んだ。そして三年の月日が経ち二〇一九年になって正式に天皇陛下が退位を表明された。平成の三十年間を振り返り、天皇陛下は在位三十年式典でこうお言葉を述べられている。

「平和の三十年間、日本は国民の平和を希求する強い意思に支えられ、近現代において初めて戦争を経験せぬ時代を持ちましたがそれはまた、決して平坦な道ではなく多くの予想せぬ困難に直面した時代でもありました。」
私はこのお言葉をニュースで聞き、平成という時代を生きてきたということがこれほどすばらしいことなのだと思います。今の戦争のない日本をつくることはとても難しいことであつたと思う。だが天皇陛下のお言葉のように「国民の平和を希求する強い意思」がその土台になるかのように支え続けてきたことは次の時代になっても受け継ぐべき大切なことであると思う。

全世界を巻き込み、人類史上最大の大戦争となつた第二次世界大戦が終わつた頃の日本は、荒れ果てたもので、亡くなつた人も四十

四万人を超える悲惨な状況にあつた。日本を含んだ枢軸国の国々は戦争賠償や経済の再建などで苦汁を飲まされていた。人々は食糧メーデーなどの日本政府に対しての怒りや悲しみでいっぱいであつた。戦争に参加していなければ、戦争が起これなければという思いでいたろう。日本の悲惨な状況であつた時から「国民の平和を希求する意思」はますます強くなつていったと言える。私は戦争を経験したことはないがこうやって苦しい思いをしてきた人々の気持ちを受け止め、理解することはできるのだと改めて気づけた。そして自分の身近な人に戦争についてもっと聞いてみようと思つた。戦争の起こつた過去は消すことはできない。しかし「もう戦争を起ささない」と次の時代に伝えることは誰もができることだ。一人一人の意識や思い、そして平和を願う気持ち。これらを一つの力にまとめることができたからこそ今の「戦争の無かつた時代」をつくりあげることができたのではないか。学んだことを生かし、繋げることは未来を明るくする方法の一つであると思う。天皇陛下はまた、こんなお言葉をおっしゃられた。

「今、グローバル化する世界の中でさらに外に向かつて開かれ、その中で英気を持つて確立し、誠意を持って他国との関係を構築していくことが求められているのではないかと思ひます。」

私はこのお言葉の中の「他国との関係を構築していくこと」という部分に着目した。今、私が思うのは戦争のない日本や社会を続ける

ためにすぐ重要であるなど同感した点だ。やはり平和を続けるにあたり、他国と信頼し合うことで争いが起これない、と考えることができる。グローバル化する世界の中では様々な問題が起きている。例えば飢餓に苦しむ民族や学校に通えない子供達についての問題がある。世界を平和にするため、私達はその人達を救う努力をもつとすべきである。二〇一九年、日本ではフードロスが大きな話題になつた。食べ物がなくて苦しむ人々がいる中で大量の食べ物を廃棄してしまつていた。これは世界を平和にする中で改善しなければならぬ大きな問題だ。先ほども言つたとおり、一人一人の意識や思い、気持ちで何か変わることは大いにあると思う。

これからもずっと平和であり続けることは難しいかもしれない。だが、そう努力することは誰にだってできる。当たり前のことにこそ、平和のピースがかくされているのだと私は信じている。

笑顔あふれる未来のために

私たちが出来ること

伊勢原中学校

末吉

陽菜

今年の三月に、ボランティア活動の一環として韓国を訪れる機会がありました。

韓国を訪れる一ヶ月前くらいから、日本と韓国の問題について悪い内容のニュースが毎日のように流れていました。両親は、

「これから韓国に行くのに大丈夫かな。」と心配をしていましたが、その時の私はニュースの内容が良く分かっていたので、韓国に行くのがとても楽しみでした。

伊勢原市内の中学生十人とボランティア団体の方たちと訪れた済州島は、韓国のハワイと呼ばれるほど美しい自然が沢山ある島でした。しかし、後になって知ったことですが、この済州ではおよそ七十年前に無差別の島民虐殺が繰り返された土地だったそうです。郭支海岸をゴミ拾いしながら歩きましたが、過去にそんな恐ろしい出来事があったなんて信じられないほどきれいな景色でした。

迎え入れてくれた現地中学生や大人たちは、みんな温かい笑顔でもとても親切にしてくれました。ここには、日本の政治やマスコミが言っていたようなもめ事は一切なくて、ただ楽しい数日間でした。

韓国から帰ってきて、母に「日本と韓国の歴史を学ぶ良いきっかけになったね。少し調べてごらん。」

と言われました。日本と韓国の間には、慰安婦問題や竹島の領土問題、微用工問題など、様々な問題がありました。そのどれもが最近に起きた事ではなく、何十年も前から解決していない問題でした。私は（そんな昔のことは今の私たちに関係ないじゃん。みんな仲良くしたらいいのに。）と思いました。けれど、昔起きた出来事は無かったことにすることは出来ないのだと思います。逆に、私たちが大人になった時に間違った選択肢を選んでしまうと、自分の子どもたちや孫の代まで苦しめ

てしまうことがあるのだと気づきました。

今回の韓国行きに同行してくれた方が、「両国の中学生の交流を身近で見て、政治とマスコミに左右されない素直な心と飾らない笑顔に感動した。」

と言ってくれました。慰安婦問題や微用工問題などは、調べれば調べるほど何が何だか分からなくなってしまう。ネットやマスコミの嘘か真実か分からない情報に振り回されるのではなく、私は自分の目で感じたことを一番に信じていこうと思いました。そしてその答えが済州島で出会ったみんなの笑顔です。

けれど、自分の国で起きた歴史的事実の中には、正確に次の世代へと伝え続けなければならぬ事もあると思います。その一つとして、第二次世界大戦の時に起こった広島と長崎への原爆投下があります。なぜなら、『戦争』なんて二度と起こしてはならないからです。

国と国とが争う事があった時に、相手の国を陥れるために核という選択肢があつてはいけないと思います。核は全てを滅ぼします。人の命や建物はもちろん、その土地の沢山の思い出や人々の未来までも奪ってしまうのです。しかし、核というものがどんなに恐ろしいものかを知っていれば、核は選択肢から消えるのではないのでしょうか。だからこそ、わかまりを残すためではなく、戦争のない平和な未来のためにありのままの事実を正確に伝え続けていくことが大切なのだと思います。昨年、の広島市の平和記念式典での、『平和への誓い』にこんな一文がありました。

平和とは自然に笑顔になれること。平和とは人も自分も幸せであること。

平和とは夢や希望をもてる未来があること。『平和』とは、「争いがないこと」だけではないと思います。私は「みんなが笑顔で、未来を夢見ることが出来る」、そんな平和な世の中になることを願っています。

受け継がれる平和への願い

山王中学校

おおば やすゆき
大場 泰之

昨年の春に父方の祖父が亡くなりました。小学生の頃に祖父から聞いた話が思い出されます。祖父は、「一九四五年三月十日、東京大空襲のあつた日、その日遊んでいた多くの友人の家はあとかたもなく焼け、一方自分は重なり合うように亡くなった人々を踏み越えて墨田川を渡りきり助かった。」と話していました。成長できなかつた多くの友人は、この時から時計が止まったままとなりました。この日、祖父が墨田川を渡りきらなかつたら父は生まれず、もちろん僕も生まれませんでした。今まさに奇跡の中で生きていると思うと感謝の気持ちで一杯になります。

一九四五年八月六日午前八時一五分、広島に原子力爆弾が投下されました。当時の広島市の人口三十五万人（推定）のうち九万六千六百六十人が被爆から二、四か月以内に死亡したとされます。その多くが非戦闘員である一般の人々です。爆発の中心では人が一瞬に

して超高温により蒸発し、影のように階段に跡を残すこともあったそうです。爆心から比較的離れた場所の人々は爆風や高温から逃れ生き延びたものの、その後以降った放射線物質を含む黒い雨を浴び、その結果白血病などの後遺症に悩まされることになりました。原爆の恐ろしさは戦後も別の形で現れました。同じ日本人から「放射能を浴びたものはうつるから近づくな」などと根拠のない差別をうけ、心を痛めることもあったそうです。

戦争は一方的に悲劇が起こるわけではありませぬ。太平洋戦争のきっかけとなる真珠湾攻撃では、アメリカの戦艦アリゾナを始めとする軍艦が多くの若い水兵とともに沈みました。戦後、アメリカは沈んだ戦艦アリゾナの上に記念館をつくり鎮魂の碑としました。今では日本人にとってハワイは人気上位の観光地となりましたが、七八年前に真珠湾で起きたことを忘れたわけではありませぬ。あるアメリカの記事によると記念館を訪れた日本人高校生が一列に整列し、頭を下げ海に沈む魂に黙とうをささげてくれたことに対して感謝の気持ちでいっぱいになったとありました。過去に起きた悲劇をなかつたことにはできません。しかしきちんと向き合い二度と同じ過ちを繰り返さないという誓いを立てることはできます。かつて互いに戦いあつた国が、今では世界をリードする無二の存在となりました。二〇十六年五月、当時のアメリカのオバマ大統領は現職で初めて広島を訪問しました。アメリカでは、「原爆が戦争の終結を早めたのであり正義である。」との考え方もあり、オバ

マ大統領の広島訪問を快く思わない人も多くいました。一方、広島では「捕虜となつた米兵も原爆犠牲者として追悼の対象になつていきます。彼らを含めた全犠牲者の追悼の意味でも、核廃絶への祈りを広島から発信してください。」と呼びかけました。オバマ大統領は、この願いを聞き入れ、国内の反対を押し切り核廃絶と平和への祈りをしました。米兵の原爆犠牲者について調べ、アメリカにメッセージを送つたのは、自身が被爆者でもある森重昭さんでした。この件があつて印象的なオバマ大統領との抱擁につながりました。あの瞬間、森さんの止まつたままだった時計は動き始め、世界中の人々がお互いを理解し、かつて不幸な戦争で敵味方となつた国同士でも知に信頼できる関係を築くことができることを目の当たりにしました。

それぞれの場所でお互いの戦没者に敬意を払い追悼をしています。これから私たちにできることは、互いを信頼し、同じ過ちを二度と繰り返さないこと、そして永遠に語り継ぐ者として記憶していくことだと思ひました。

戦争を二度と繰り返さないために

山王中学校

ひろた
廣田 和奏

「戦争」これはこの世の中で一番起きてはならないことである。戦争は罪のない人々の命を奪い、生き残つた人々の心に悲しみをも

たらずことしかできない。一九四五年八月十五日、戦争は終わりを告げた。あれからも七十四年が経つ。元号も昭和、平成を過ぎ、令和となつた今、私達は毎日美味しいごはんを食べ、良い学習環境が作られ、安心して眠ることができる、そんな「平和」を具現化したような世になつた。でも考えてみよう。もうこの日本の中に戦争を体験した人は何人いるだろうか。私の祖父も戦時中満州で育ち命からがら日本へ帰つてきたそうだが、詳しい話を聞くことなく亡くなつてしまつた。今まで戦争の恐ろしさを知っている人々の存在があり、この国は戦争をすることは無かつたが、あと二十年も経つとそんな人はごくわずかになつてしまふだろう。戦争の恐ろしさを知らない私達は戦争を二度と繰り返さないために何か身近に意識できることはないだろうか。

まず、「相手の身になつて考える」ということが必要だと思ふ。小さい頃よく、「けんかは戦争のもと」と言われた。けんかを例にして考えてみよう。小さな子二人がけんかしてるとして、A君B君それぞれが、

「B君が横入りした。」

「A君がちゃんと並んでいなかったのがいけないんだ。」

と言つたとする。どちらもお互いの行動を批判しているが、ここで相手の身になつて考えてみるとA君は本当はちよつとよそ見していたのかもしれないし、B君はわざと横入りしたわけではないのかもしれない。自分の言っている言葉だけが正しいとは思わずに相手は何でそうしたのかを考えればけんかは起こら

なかつたはずだ。戦争だつて同じで、自分の国が攻撃されて犠牲者が出るのが嫌と思うのなら相手も同じことを思っているだろう。このことを国民一人一人がわかっているのなら自然と戦争は起きないのではないだろうか。

次に、一人一人の違いを受け入れることが必要だと思う。世の中にはいろいろな個性や境遇を持った人がいるだろう。男の人、女の人、お金持ちの人、貧乏な人、例を挙げればきりがない。学校でもこの一人一人の個性の違いがけんかやいじめにつながることもある。文化の違いや宗教の違いによって来ると思う。この世界にはたくさん文化があつて、いろんな考え方があつて、「みんな違ってみんないい」し、みんな同じ人間だ。文化は人間が作り出したもので、それによつて殺されていい人、戦争していい理由はないと思う。一人一人どんな個性であつても受け入れる努力をすればその先にある文化などの違いも受け入れることができるのではないだろうか。

現在、戦争を体験した人が少なくなつていくが、それにもなつて戦争のことを知る機会も少なくなつてきていると思う。学校でも戦争のことについては社会くらいでしか習わない。戦争の恐さを知つて語り継ぐにはもつと学校などで戦争のことを知る機会を増やせなければいけないと思う。また今の時代、世界ではグローバル化や情報化が進んでいて、中学生もスマートフォンを持つ人が多くなつた。インターネットで戦争のことを調べたり世界の人とやりとりするのは簡単だ。これを

上手に使えば世界のいろいろな文化に触れることができたり、戦争について新たな見解を持つことができるのではないだろうか。来年はここ日本でオリンピックが開催される。オリンピックはたくさんさんの国が参加していて、選手が武力ではなくスポーツで戦っている。きつとこのオリンピックを多くの人が見れば、国と国との平和の架け橋になつて、戦争が起きなくなる一つのきっかけになつてほしい。

「新しい時代に思う」

成瀬中学校

おかだ ひろたか
岡田 拓能

元号が平成から令和に変わりました。第二次世界大戦から七十年以上経ちましたが、世界に目を向けてみると、戦争や紛争が未だに各地で起こっています。

人はなぜ戦争をするのでしょうか。僕はこう思います。家族や友達同士でけんかをする理由のように、少しの意見の食い違いや、一人一人の一つの出来事に対する解釈の違いからではないでしょうか。それは残念ながらもなかなか変えられることはありません。

僕は、この十連休中に靖國神社に行きました。境内にある「遊就館」という場所では、戦前、戦後の記録や軍人さんの所持品、遺書などが展示されており、戦争の記録を生々しく物語っていました。中でも一番印象に残っているのは、ある軍人さんの遺書です。まだ一才の子供と身重の妻を残して死んでしま

という内容で、見ていてとても辛かったです。突然「死ぬ」と言われているのと同然の中で、このような遺書が書けるのはとても立派だなと思ひました。他にも、血書や人間魚雷など様々な心に残るものがありました。このような人たちの犠牲の上に今の日本が成り立っています。これは、いつの時代になつても、決して忘れてはいけないことだと僕は思ひました。今、何気なくボーツと生きている自分は過去の子供たちにとつては夢のような日々なのです。その事を意識して生活していく事が僕たちがするべき軍人さんへの一番の供養だと僕は思ひます。

平和について考えさせられた出来事が僕にはもう一つあります。それは春休みに国際交流研修で韓国の済州島に行った事です。その研修でもとても強く感じたことが二つあります。コミュニケーションを取ることの大切さ、自分の目で見ることの大切さです。研修に行く前は、マスコミで取り上げられている日韓問題を見て、現地の中学生と仲良くなれるのかという不安がありました。しかし、韓国の中学生は、僕らにとつても優しく、大歓迎してくれました。日本に対して悪いイメージを持っている人がいることは事実です。しかし、皆が皆そう思っている訳ではありませんでした。三日間の間、様々な体験を共にし、交流して、僕は現地の中学生ととても良い友達になることができました。話してみなければ分からないことも沢山ありました。このように実際に交流することによつて、新しくより良い関係が結ばれるということを学びまし

た。この経験を通して、コミュニケーションを取り合い、相手を理解しようという思いやりの気持ちをも一人でも多くの人が持てば改善される問題も沢山あると希望を持ちました。

そして、僕は普段から目にしてきているニュースやテレビなど情報が全てだと思いがちです。しかし、沢山の情報が取れる今の時代だからこそ、しっかりと自分の目で見て耳で聞いて判断することが大事だと実感しました。

先に書いたように、近い人とけんかをする僕ら人間が戦争のない平和な世界を築くことは大変なことかもしれません。しかし、一人一人が平和について考え、意識を持つことで変えられることは確かにあります。一人の百歩より百人の一步だと思えます。

自ら動き、見て、感じ、今この何気ない日常をかけたえのない幸せと感じて生きていくことが大切です。そして、このような事を考えて生きていこうと思います。

私なりの「平和」

成瀬中学校

かまの
釜野

ゆい
結衣

「戦いや争いがなく穏やかな状況」これが辞書に載っている平和の意味だ。これが本当に平和の意味なのか？平和とは何かと考えた時に正解となるものがこれか？私は平和の意味とはあやふやで各々によって異なると思う。

一九四五年八月六日に、日本は世界で唯一

の被爆国となった。ものすごい温度の熱線、放射線、凄まじい爆風、真っ青な空に出来たきのこ雲。この瞬間に、無差別的に沢山の人が殺されてしまった。特に、被爆で亡くなった人の原因はやけどが多かった。このやけどは特殊で、体内の水分が一瞬で水蒸気に変わり、膨らんだ皮膚が裂けて垂れ下がるそう。

これは「人間が感じる痛みの中で最大の痛み」と言われている。また、原爆投下から三時間後に、爆心地から二・三キロメートル離れた御幸橋というところで撮影された写真がある。この写真に写った人々は、肌が焼けただけ、髪は激しく縮れ、服は焼けて肌が剥き出し、多くの人が裸足だ。街は至るところで火災が起きて建物は倒壊し、人々は幽霊のようであったという。熱さと水欲しさで自ら川に飛び込んで命を落とす人も沢山いたそう。だが、今の私たちにとっては、遠い昔のことで、到底理解出来ない苦しみだろう。授業で学んだり、ドキュメンタリー映像を見るくらいでしか情報を得ることが出来ない。自分から進んで戦争や原爆について調べる人は少ないだろう。実際に戦争の時代に生きていた人たちも

段々と減っていき、その時に人々が感じていたこと、目にしたものを知る機会は減って行く。唯一の被爆国である日本で生きる私たちでさえ、原子爆弾の怖さをよく理解できていない人が多い。その上、現在の技術は飛躍的な進歩を遂げ、核兵器の威力は著しく増大している。そんな核兵器を持つことを国際的に認められた国は五か国、認められてはいないが所持している国は三か国もある。権力を示

す手段として所持している国が多数だが、もし投下された場合には日本が経験した以上の被害となるだろう。

原爆が投下されてからの数年は、「平和」とはかけ離れていただろう。沢山の人が亡くなり、苦しんだ。これを平和だと考える人は少ないだろう。それでは今の日本はどうだろう。戦争がないから平和なのか？朝起きて、朝食を食べ、学校へ行き、授業を受け、昼食を食べ、部活へ行き、風呂に入り、夕食を食べ、安心して寝ることが出来る。これは平和なのか？今の日本では死者が多数出るような戦いは起こっていない。だが、いつ第二次世界大戦のような戦いが起こってもおかしくない状況だと感じる。北朝鮮からのミサイルが投下されたり、内戦やテロが起こっている国がある。これはお互いを尊重し合い、理解することと解決するのではないだろうか。生まれた国が違う、言葉が違う、肌の色が違う、宗教が違う、文化が違う、そんなお互いの違いを受け入れ、尊重し、理解することで、日々の小さな喧嘩から、外国との関係性まで良好に変えられるのではないか。自分と違う意見だと相手を不正解だと決めつけ、自分を正当化する人が多いと感じる。私は、相手の意見にもきちんと耳を傾け、考えを理解した上で反論したり、それは違うのではないかと声を上げるだけでも、戦いや争いの無い世界へと一歩近づくのではないかと思う。

きっと、今後様々な経験をしていく中で価値観は変わっていくだろう。今の私は、「戦いや争いがなく、一人ひとりが笑顔で生活をす

ることができている状況」これが平和の意味だと考える。

平和とは何か

中沢中学校

亀井 かめい

颯太 そうた

今までたくさんの人が戦争によって亡くなっています。しかもその大半の人が直接戦争に関係の無い人だと思えます。僕が平和という言葉を聞いて最初に思いつくことは戦争が無いということです。戦争というのはとても恐ろしいもので起きてはならないと思います。

僕が戦争について聞いた話では、戦時中どの人も貧しく苦しい生活を続けていて、空襲が自分の住んでいる所に落ちてこないよう、家を黒く塗ったり明かりを消したりしていたということを知りました。また、今では当たり前である入浴することができなかつたそうでも辛かつたのだらうと思えました。それだけ辛い経験を小さい頃にした人がいるということを知ると、戦争とは人が亡くなることだけが怖いのではないのだと感じました。そう考えてみると実際に戦争が起きて喜ぶ人はいないと思えます。たしかに、戦争が起きると医療や工業がとも発展します。けれど戦う相手にも家族がいて、死にたくないという気持ちも少しはあるはずですからその相手を殺して自分が生き残ったとしてもいろいろ悲しい人が悲しんでしまうと思います。戦争が起きるといことはたくさんの

人を悲しませるといことです。あと少しで実際に戦争を経験した人が下の世代に戦争の恐ろしさを話すことができなくなってしまう。だからいろいろな人が戦争の恐ろしさを知り戦争を起こしていけないと伝えていかなければいけません。

また元号でも平和であるということがどれだけ大切なことかわかります。令和、平成、昭和どれも平和であることを望む気持ちも込められています。このことから日本は戦争で大きな被害をうけたこともあり戦争でたくさんの人が悲しまないことを理想としているのだということがわかります。日本が戦争をしてたくさんの人を苦しめたことは事実です。

このことを悔やみ続けるのではなく、もう二度と同じことをしないようにしなければならぬのだと僕は考えます。このように考えてみるとよく耳にする当たり前のように平穏な生活をするということが一番の幸せであることがわかりました。そして平和とは意識していかないと感じることができないもので戦争が起きて初めて大切であると認識されるものだと思います。僕が考える平和とはそのもの自体にあまり気付くことのできない幸せなのだと思いました。

しかし、戦争がなければ平和であるということではないと思えます。それは人としての権利いわゆる人権が守られているか関係していると思えます。なぜかというところではあまりそのような問題はありませんが世界にはたくさんそのような問題があります。例えば黒人差別などです。差別によって社会

的暴力がありそれに人が傷つき思うような生活を他の人のようにすることができないということは決して平和であるということができないと思えます。つまり、どの人も当たり前のように同じような生活を送れる事が一番の幸せでありそのような状況であることを平和というのだと僕は思っています。

未来の平和のために

中沢中学校

水嶋 みずしま

輝 きらら

私は、今まで生きてきた中で食べ物も足りなくなってしまうたり、大切な人をなくしてしまったりしたことは、一度もありません。また、普段生活している中で戦争について深く考えることもありませんでした。そんな中私は、韓国の済州島へ研修に行く機会がありました。その際に私は、本やインターネットで韓国の歴史や、名所などについての資料を見ていたときに、日本についての知識も深めようと思いい、終戦記念日について調べました。日本政府は八月十五日を、「戦没者を追悼し、平和を祈念する日。」として、終戦記念日や終戦の日と称しています。毎年八月になると、この十五日の終戦記念日や六日に広島県、九日に長崎県への原子爆弾投下について、よく報道されています。

その中でもユネスコの世界遺産にも登録されている原爆ドーム。私は実際に、広島県を訪問して見たことはありませんが、写真を見るだけで胸がしめつけられるような感覚になり、戦争の恐ろしさを痛感します。

「二度と同じような悲劇が、起こらないように。」

との戒めや願いをこめて、負の世界遺産とも呼ばれています。原子爆弾といった最強の破壊兵器が、なぜ使用されたのかは今でも議論の対象となつています。加害者のアメリカは、「日本との戦争を、早く終わらせるためだった。」

と述べています。被害者の日本は、

「アメリカがソ連との関係を、優位にするためだった。」

と述べています。

こうした多数の主張が飛びかう中で、物事を白黒はつきりさせることはとても難しいですが、実際には事実の一つとは限りません。ですが、原子爆弾の投下により罪のないたくさんの人々が、一方的に殺されてしまったことは歴とした事実です。

私の通う中沢中学校のスローガンには、

「あたり前をあたり前に。」

という言葉があります。平和について考えたとき、私は一番にこの言葉が頭に浮かびました。毎日、美味しいごはんが食べられて、学校で勉強ができて、温かい布団で眠る。そんなあたり前の日常が、一瞬で途切れてしまうと考えると、とても恐怖心に包まれます。あたり前であることの幸せは、失って初めて気

づくものだと思います。裏を返せば、不自由なく過ごしている、あたり前の日常の尊さは一度失わないと気づかないものだと、思います。原子爆弾が投下され、罪のないたくさんの人々が一瞬にして死んでしまったという事実は変えられません。もう二度と同じようなことが起きないように、非核三原則をもつと世界に浸透させるべきだと思います。変えられないものよりも、変えられるものに目を向ければ今よりも、もっと前に進めるはずです。私たち人間は、不自由になつたときによく気づくことができます。だとしたら、今なのではないでしょうか。もっと非核三原則を浸透させることができるのではないのでしょうか。

戦後から七十四年経っている中で、今この瞬間もどこかでテロや紛争が起きてしまっているという現実の中で、言葉にしたとしてもなかなか分かつてもらえないことは、たくさんあります。それでも諦めずに伝えようとする気持ちは、いつか届くと信じてこれからの未来を背負っている私たちが、あの惨劇を語り継いでいきたいと思えます。

【佳作】

平和な世界へ

伊勢原中学校

五月女 隼人

さおとめ

はやと

人の命。それはとても尊いものです。しかし、これまで戦争や事件で多くの人が命を落としていきます。これは昔だけでなく、今も起きてしまっています。こんな事はあつてよいのでしょうか。

ブオーン、ブオーン。戦闘機が飛んでいる。空を見上げると、戦闘機が青・白・赤の三色、つまりフランスの国旗を色のついた煙で描いていました。

約六年前、僕はフランスに住んでいて、毎年七月十四日に行われているフランスの軍事パレードを見に行きました。この軍事パレードは、シャンゼリゼ通りを兵隊が並んで歩いていたり、バイク、騎馬隊、そして戦車も走っていたりしていました。空には戦闘機が煙を出しながら飛んでいました。このパレードは、大勢のギャラリイ、テレビの取材をしている人もいたので、当時の僕はお祭り感覚で見えていました。だから、戦闘機・戦車を実際に見ての感想は、

「すごい、カッコいい！」

というとても単純なものでした。しかし、今もう一度パレードの戦闘機・戦車を見たら、視点が変わってパレードとはいえ、人を殺すための兵器がとても身近にあるからその感想

つたという。

これら全てを私は知らなかった。それはつまり、私にとつては回天という存在も回天に苦しんだ人も、何もかもが元より「無かった」と言う事を意味するのではないか。そのあまりの恐ろしさに衝撃を受けた。それから私は戦争が起きた以上は終始、当事者として見なければならぬと考える様になった。

時は流れ、平和な時代で生まれ育った人々は増え、戦争を五感で感じた人々は徐々に姿を消してゆく。もしもこのまま戦争の歴史に目を逸らし、耳を塞ぎ、口を閉ざしたのなら戦争は私達から消える。しかし、それは決して平和へと繋がる道ではない。戦争は人の命や未来だけでなく、理性や心までも奪う。理性や心が残っていたのなら、人を一つのかげがえのない命としてではなく数としてしか見ない様な原子爆弾や特攻隊等の兵器は空想上のものであっただろう。だが現実には存在してしまつた。これは揺るぎようのない事実であり、私達は向き合つていかねばならない。戦争をエンターテイメントとして扱う物が混在する今日、決して戦争を美化する事なく受け止め真実を語り継いでいく必要がある。

春夏秋冬の一日であつても、戦争により大切な人を亡くした事で悲しみの象徴へと姿を変えた日がある。祈りだけではその悲しみを癒やす事は出来ない。しかし、四季の移ろうこの日本という国が平和の象徴となりその苦しい記憶も安らぐよう私は祈る。そして回天らの負の遺産たち戦争を知り、逃避の末の消滅ではない本当の意味での平和を願つてい

きたい。

忘れてはならない日

山王中学校

おのてら
小野寺 陸

世の中で一番辛くて悲しいことは、人が死んでしまうことだと僕は思います。日本だけではなく、世界中で毎日のように人が亡くなつていきます。自然災害・事故・病気など、自分ではどうにもできないこともあります。でも、戦争や犯罪は防ぐことができると思つてます。争いごとをすれば、必ず誰かが傷つき悲しむ人がいるでしょう。僕は人が傷つけあつたりすることに、何の意味があるのか分かりません。

過去に日本では、戦争をきっかけに多くの人々が亡くなつてしまいました。その戦争で傷ついた人たちがたくさんいた中、一九四五年八月、アメリカが初めて原子爆弾という核兵器を日本に使用し、その威力を試したという出来事が起こりました。

一九四五年八月六日午前八時十五分、広島市に一発の原子爆弾が投下、そして三日後の八月九日午前十一時二分、長崎市に対しても原子爆弾が投下されました。投下された直後、街には熱線が広がり、何もかも焼きつくさる強烈な熱線は一瞬で人々の皮膚を溶かし重度の火傷を負わせ、空には大きなキノコ雲が浮かび上がつていたといいます。

三年前の夏、僕の姉は二度目となる広島

平和記念公園、資料館を訪れていて、当時、僕と両親にその時の写真を見せながら自分の目で見てきたこと、実際に原爆の被害にあわれた方の話をしてくれました。その内容は原子爆弾という核兵器のすさまじい破壊力と人々にどれほどの苦しみを与えていたのかがとても伝わる話でした。僕はあまりにも悲惨な話に、同じ人間が起こした事だとは思いたくありませんでした。

また被害に会い、生き延びた人々がその後、後遺症に苦しみながら生きていかなければならなかった話も聞いて、助かったから良かったというわけではなく、助かった後も大変な思いをしながら毎日を過ごしていたことを知りました。本当にあつてはならない出来事だと強く感じました。

毎年、夏休みになると八月六日広島市平和記念式典、八月九日長崎市平和祈念式典に多くの人が集まり、原子爆弾が投下された時刻に「黙祷」が行われ、その様子がニュースで流されています。僕は改めて「黙祷」の意味を調べてみました。声を出さず神などに祈り、人が亡くなった時に、亡くなった方の冥福を祈るために行うことが多いと書かれています。その「黙祷」には、深い深い意味がこめられているのだと僕は思いました。戦争をしたことによつて、核兵器という恐ろしい物が使用され、多くの人が一瞬にして亡くなつてしまつたこの悲惨な出来事を「黙祷」が思い出させてくれる意味があると思えました。

戦争を知らない僕は、自分で調べたり姉から聞いた話でしか知ることはできないかも

れないけれど、亡くなった人たちのためにも、過去の戦争について知ることが大切だと思います。人の命より大切なものは僕はないと思っています。

命の大切さを知れば、人を傷つけることも減っていくのではないかと思います。平成の時代に続き、令和の時代も戦争のない日々が続くと僕は信じています。

だから、毎年「黙祷」が行われる日を忘れてはいけないと思いました。

核、白菊の思い

山王中学校

栗原

いかる

二〇一七年八月三日、私は、祖父母、両親、姉とともに、新潟県長岡市を訪れていました。それは、信濃川の広大な河川敷で長岡花火を見るためです。父がチケットを取ってくれていました。長岡花火は、日本三大花火のひとつで知られています。

皆さんは、新潟県が第四の原爆投下予定地だったことを知っていますでしょうか。一九四五年八月九日、長崎に原子爆弾が投下された翌日、次は新潟県に原子爆弾の攻撃があるとされ、新潟県では、緊急会議が開かれました。実際市民の避難行動が開始されたのです。新潟県に原子爆弾が投下されることはありませんでした。長岡空襲により、一四八六名の尊い命が奪われました。長岡花火で打ち上げられる、白一色の花火「白菊」は、空襲で亡

くなった人の、慰霊と復興、そして平和への祈りを込め、長岡の空へ高々と打ち上げられます。この長岡花火は、戦争という悲惨な出来事を後世に伝えていく、大切な祭りだと私は思います。

広島や長崎に投下された原子爆弾。この核兵器は、今の世界に必要なのでしょうか。

二〇一七年、核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）が、ノーベル平和賞を受賞しました。原子爆弾が日本に投下されてから七二年の歳月の中で、核兵器に対する考えが変わってきている時代が今だと思えます。戦争は、力と力の戦い。その力に核兵器が使われてしまったら、この世界はどうなってしまうのだろうか。平和を求める私たちにとって、核兵器などの力関係を作らないことが、平和への第一歩なのだと思います。そのために、ICANが行っている、核兵器の廃絶運動をこれから先も続けてほしいと思えます。今私達がやるべきことは、自分にできることを一人一人が考え、平和な社会を強く望み、行動につなげていくことだと思います。

核兵器は人類を滅亡に追いやる程の破壊力がある、大量破壊兵器だ。何事も力では解決しない。核兵器は今の世界には必要ではないと私は考えます。広島、長崎に落ちた原子爆弾の悲惨さを知り、白菊の思いを私も胸に刻み、自分にできることを模索していきます。

「平和」のバトンを繋ぐ

成瀬中学校

前川

颯太

今年のゴールデンウィークは、新天皇の即位と改元に伴い、十連休という長い休みとなりました。「平成」が終わり「令和」へと移り変わるタイミングで「平和作文」を書くという宿題は、新元号を明るく気持ちで迎えるための絶好のチャンスになると前向きに捉え「平和とは何か。」を考えてみることにしました。

自分には、住む家があり、毎日ご飯を食べることができ、安心して眠ることができます。家族は皆健康で、通える学校があり、そこには先生や友達がいいます。そして、何不自由なく身体を動かすことができるので大好きなスカッシュに打ち込める日々が送れています。そんな当たり前に続く繰り返しの毎日こそが「平和」であると思えます。この当たり前の日々に感謝することなく、退屈だとさえ感じてしまうのは、戦争のない時代に生まれ、戦争のない現在の日本を当たり前だと思ってしまうからです。

戦争は、遠い過去のことであるかのように感じ、想像するだけでも不安や悲しみで押し潰されそうになりますが、世界の歴史から見れば、日本は、つい最近まで、世界を敵に戦っていたということになります。人間が武器を持ち、殺し合いをする度に、無数の命を奪い合っていたなんて、恐ろしいことです。そ

して、当たり前前の日常が一瞬にして火の海と
なってしまうた原爆によって、家族を失い家
を失った悲しみや絶望を考えると、自分は、
現代の平和な日本に生まれ育つたことが幸せ
なことだと感じます。しかし、今でも世界で
は、戦争やテロが起きていて、人々が傷付け
合っているのが現実であり、それは、とても
悲しいことです。

自分は、平和主義な性格で、暴力的な喧嘩
はもちろんのこと、些細な言い争いも苦手で
す。だから、戦争をして得るものは何もなく
失うものばかりなのに、なぜ戦争をしてしま
うのか理解ができません。ただ一つ考えられ
るとしたら、一方的に責められ攻撃をされて
しまったら、どんなに平和を掲げても滅ぼさ
れてしまうので、自国を守るためには戦うし
かないと思ひ込んでしまうかもしれないとい
うことです。そうならないためには、お互い
の意見に耳を傾け、尊重することが大切だと
思います。争いを起こすよりも、お互いに協
力したほうが、得るものが多いと考えられる
からです。戦争は人間が起こすものなので、
戦争を無くせるのも人間です。日本は、辛い
過去を経験し、一度と繰り返してはいけない。
という強い思いで戦後を支えてくださった
人々のお陰で今、日本の「平和」があるのだ
と思います。だから、自分は、戦争や原爆の
真実を知り、恐ろしさを伝えていかなければ
ならないと考えます。

「平和とは何か。」を考えたとき、一番に想
像するのは、戦争が無いことでした。しかし、
戦争が起こらなければ「平和」というわけで

はなく、互いに認め合い、思いやり、助け合
い、共に生きていく世界こそが「平和」だと
考えるようになりました。これは、日常生活
でも大切なことです。「平成」という時代は、
戦争はありませんでしたが、災害によりたく
さんの命を失い大きな被害を受け、辛いこと
の多い時代でした。しかし、日本中が手を取
り合い助け合う姿は、戦後の「平和」へと向
かおうとした姿に似ているような気がしまし
た。「平成」から「令和」へと時代が移り変わ
り改めて思うことは、自分たちは「平和」の
バトンを後世に繋げていく努力をしなければ
ならない。ということでした。

言葉で伝える平和

成瀬中学校

おおたけ
大竹 恵

なぜ世界の人々のほとんどが幸せな暮らし
平和な暮らしを望んでいるのに、世界平和は
実現しないのでしょうか。突然ですが、平和
とはどのような事をいうと思いますか。私は
笑顔で幸せに暮らしていける社会だと考えて
います。しかし辞書では戦争や争いがなくお
だやかな状態と書かれています。みなさんは
どうでしょう。辞書や私の考えの人もいれば
違う考えの人もいるでしょう。世界平和が実
現しない理由の一つとして、世界の人々の平
和に対する考え方が違うからといえるでしょ
う。だからといって平和の考えを一つにしぼ
る事は不可能です。だからこそ自分の考える

平和を伝え、違う平和の考えを受けとめ、尊
重し合わなければなりません。一人一人が自
分なりの平和の考えをもち、それを意識して
生活することで自ずと世界平和へと近づくの
ではないでしょうか。

そして、世界平和が実現しない理由の二つ
目は、やはり争いや戦争が絶えないというこ
とでしょう。今も、戦争におびえながら生活
している人がまだまだたくさんいます。そもそ
も戦争が起こる理由は、食料や資源の奪い合い
によるものや国家や政府に対する不満、意見
のくい違いなどです。いつの世も人々が争う
理由は決まっています、このような理由が生ま
れる事をふせぐため、政府はもちろん国民全
員が意識しなくてはなりません。一人が意識
していたって、戦争につながることを防ぐ事
も戦争がなくなることもありません。私が戦
争を少しでも減らす、なくすために一番に行
うべきことは戦争についての教育だと思っ
ています。なぜ戦争が起こるのかや、戦争のお
そろしさについて、それだけでなくもし戦争
が起きあれてしまった国を再建するのは今を
生きる子供たちだからです。それなりの知識
を得ていないといけません。勉強だけでなく
日常生活中友達と触れ合う中でいけんがこと
なって争いごとになったとき、暴力ではなく
て話し合い話し合いで片づけられるようにす
る力を身につける場にもなります。教育は戦
争を減らすためにも、世界平和に近づけるた
めにもとても大切になってくるのです。

今回、世界平和が実現しない理由二つを挙
げましたがこれは私の考えであり、他にもた

「平和」とは

中沢中学校

藪内 やぶうち

玲音 れお

くさんの理由があると思います。世界平和を実現するために、少しでも世界平和に近づけるためにも、自分でなぜ世界平和は実現しないのかを考えてみてそれをかいしようする方法を考えどんなに小さなことでも行動すればいいのではないのでしょうか。世界平和を実現することはとても難しいことですが、近づけることならいくらでもできます。例えば、戦争や、原子爆弾についての授業を学校でやったりしますが、授業を聞いて終わるのではなく、自ら進んで戦争や、原子爆弾について調べてみたり、自分たちが大人になったときに子供と、世界平和について話しあったり、日本がうけた原子爆弾の被害の話しをしたりと私たちにできることは思っているよりかたくさんあります。何より日本は世界で唯一の原爆被害にあった国です。それだからこそ日本人にしか伝えられないこと、できないことがあるはずです。

私たちには言葉があります。世界平和が実現しない理由を考えてわかりましたが、自分の考えを伝えるのは始まりません。自分の考えを伝えるのは勇気がいるし難しいことですが考えを伝えることで世界は変わります。少しずつですが平和に近づきます。幸せな生活のために、世界平和のために、私は自分の考えを言葉にして伝える人でありたいです。

「平和」とはなにか、と聞かれたら僕は、争いが無く、他人同士を尊重しあえる世界だと思っています。

僕は今、なに不自由なく暮らせている。これは、ものすごく幸せなことなんだと思う。これは揺るぎない考えなのは確かだが、同時に、あたりまえなことだとも思ってしまう。腹が減れば、食べたい物を食べられる。喉が乾けば、お金を払えば自分の飲みたい物が飲めるし、蛇口を捻れば体に害の無い安全な水が出てくる。他には、学校に行けばいろいろな知識を得ることができ、このように、あたりまえだと思っていたことでも世界的に見たら日本は治安も良く、安全な国として有名だが、世界にはどのような暮らしをしているのかを、この作文をきっかけに調べてみることにしました。

インターネットで調べた結果、世界では毎日、二万五千人もの人々が飢えや貧困などによる理由で死んでしまっている。計算をする、これは五秒に一人の子供が死んでしまっている計算でした。僕は「このことを知った時、あらためて自分が幸せだと、そして、自分がどれだけ愚かな認識をしていたことを再認識しました。

このように、僕たちのような生活ができない人々は他に、戦争や紛争などが今でも起き

ている。過去には日本も戦争を起こしていることを授業で学んだ。様々な理由があるがなぜ争いが起きてしまうのか考えた。するとこのような言葉を目にした。「どっちも、自分が正しいと思っているよ。戦争なんてそんなものだよ。」そのとおりだと思った。自分自身の考えが正しいと思っているからこそ、対立した時に争いが起きてしまうのだ。だからこそ、僕が冒頭に言った他人同士を尊重することが大切だと思います。詭弁だったり綺麗ごとで聞かえてしまうかもしれないが僕はこの自分の考えに自信をもっています。たしかに自身以外の考えや意見などを分かり合うのは決して簡単なことでは無い、だから今でも戦争や争いは続いてしまっている。

「平和」とはと、最初の答えに戻りますが、僕は冒頭の答えに変わりは無いが、戦争や貧困などの大きく社会的に問題になっていることを一番に念頭におくのではなく、今の自分がおかれている立場を十分に理解し、毎日学校に行けることや、安心して眠れることを、あたりまえとは思わず、この日常にあるあたりまえがあたりまえに思えることに感謝をし、世界では、理不尽なこと命を落としてしまっている人々がいるということを理解することが大切だと思えます。

まだまだ、世界が完全に平和になるためには、人種差別、宗派の違いなど問題は山のように残っているが一人一人が他人同士の考えを受け入れ、自分たちの日常にある幸せに感謝をして、平和とはなにか、平和の尊さを理解をし、誰かの不幸せが自分の幸せだと言う

ことを努努忘れずに、生きていければ、僕たちは一歩ずつ確実に争いの無い、他人同士を尊重し合える世界に近づけていると僕は思います。

本当の幸せ

中沢中学校

振りはら 振原

なつみ 菜摘

「平和」とは何か。そう尋ねられた時、一体何と答えるだろう。私の場合、「平和」とは今の私の日常だ。そう答える。私の一日は朝起きて朝食を食べ、学校へ行き授業を受け、放課後は部活動に所属する訳でもなければ学習塾に通う訳でもなくまっすぐ家へ帰宅し、その後風呂に入り夕食を食べ、歯をみがき、のんびり過ごした後、就寝。といった具合に割と普通なものだ。これを毎日くり返している。私の日常とは普通なのだ。

特別な存在になりたい。特別な生活を送りたい。テレビの中のヒーローを見て一度はそう願ったことがある人もいるのではないか。私はある。それも一度や二度の話ではない。しかし、あるときふと、あたり前のように普通の日常を送れている事こそが平和であるという象徴なのではないだろうか、「普通」を普通と言えることこそ、この日常が平和である証しなのではないか。と言う考えが頭をよぎった。日々の生活の中でつらいことや嫌なこととはたくさんある。それでも大切な家族や友人がいて、当然のように食事をすることがで

きる。孤独や飢えで苦しい思いをすることがない。たったそれだけのように思うかもしれないが、それでも「平和」と呼ぶには十分ではないだろうか。

ほんの百年ほど前には世界中で戦争が行われていた。そもそもなぜ戦争が起きるのか。様々な理由があるが、その内の一つが食料や資源の奪い合いだ。国のため、国民のため、より一層暮らしを豊かにしようとするため。

戦争では軍人ではない一般の男性も兵士として戦地へ送られる。国内の食料や物資は兵士達が優先され、国内に残った人々は満足に食事をとることもできなかった。そのうえ、いつ空襲などで自分の住む地域が焼け野原と化してしまいかも分からない状況で、毎日けんめいに生き抜いていた。まさに平和とは真逆の生活である。そもそもなぜ人を殺し、町を焼き、時には自らの命をも犠牲にして戦うのだろう。なぜそこまでして他の国から食料や物資を奪わなければならないのだろう。国をより豊かにし、国民が平和で安定した生活を送れるようにしたいのなら戦争なんて逆効果でしかないというのに。平和を望み、手にするために、平和を破壊しつくす戦争を起す。私にはそれが、ひどく滑稽に思えてしまう。なぜ平和を求め、自ら平和を壊すような真似をするのだろうか。

戦争が終わると必ず戦争をした国同士で話し合いが行われ条約が結ばれる。勝った国は負けた国から多額の賠償金や領土の一部を得ることができ。しかし、戦争に勝った国の国民たちはそれで本当に幸せになれるのだから

うか。負けた国は言わずもがなこの先何年も苦境に立たされるだろう。でもそれは勝った方の国にもあてはまるのではないだろうか。戦争による死者は数十万人にも上る。家族や友人、知人など大切な人を失って悲しい思いをしている人は、実際に亡くなった人の数よりも遙かに多いはずだ。戦争というものは、たとえ勝ったとしてもすぐに平和が訪れる訳ではない。そればかりか、戦争により心に大きな傷を負い、その先一生苦しみ続ける人だつて多くいるだろう。戦争は勝つても負けても本当の意味で幸せになる人はいない。そして、そんな状況から平和な生活を取り戻すにはとてつもない時間を要することになる。だから、戦争は何があっても起こしてはならないのだ。

私は今のごく普通の日常こそが「平和」だと考える。そして、「平和」であることこそが、本当の幸せなのだと思う。

平和作文を書いた皆様、
ありがとうございました！
作文を書いた時を思い出して、
これからも時々「平和」について
考えてみてくださいね。



伊勢原市公式イメージキャラクター
クルリン